

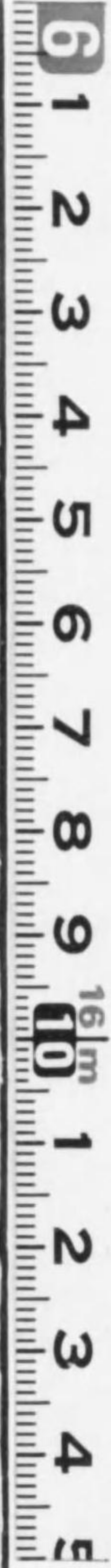
特254

551

遠藤宗作著

國士仙波兵庫翁を憶ふ

仙波兵庫翁追悼録刊行會



始



特 254
551



仙照院殿慈尊兵翁清大居士の英靈に捧ぐ



序

岳父仙波兵庫は昭和十年九月四日の詠草

願くは秋の彼岸にわれ死なん其の中日の入相のころ

の通り去る九月二十三日彼岸の中日のひるさがり眠るが如き大往生を遂げたことは、古の英傑の死に彷彿たるものがあるかの熊谷直實の死の豫言にも優るものがある。而も其の日は加波山上義舉の五十七回記念日でもあつたのはまことに意義深い事と思ふ。

翁の逝去に際し親しく靈前に供へられた故舊辱知諸賢の數多き御弔詞御弔電の悉くは潰族一同の胸に迫る感激そのものであつたから直ちに之を装訂して永代家寶と爲し、之を日夜兒孫に服膺せしめつゝあり、中に「仙波兵庫翁の魂の存する限り日本は神國に候」と山形市外有耶無耶莊無名政客御弔詞の一節の如きは至言人の心を搏つものがあつた。

翁の生涯を一言にして盡せば二萬九千五百三十餘日八十一年を貫いた國を愛する憂國的至情が全部で、たしかに神國的存在であり、また翁の全面目でもあつた。この永遠に亡びざる「仙波魂」の具現したものを、早卒の間にまとめて一本と爲し、靈前に捧げた所以のものは

紀元二千六百年 今 皇國日本の欲求し居る最大のものこそ翁の持たれた如き精神を臣道實踐の上に七たび生かして行くことでありこれを普現せしむることが極めて必要と思考したからである。

本冊子は末尾に記せる二十餘冊の傳記及公文書並に翁の日誌、來翰、知友の談話等より抄録せるもので、調べれば調べる程未知の愛着を感じる好資料は得て盡きざるも十一月十二日の本葬の靈前に捧げんが爲め前記刊行の趣旨さへ表し得ば足れりとし、調査及取捨撰擇に不充分の點あるを顧みず、茲に發刊せる次第である。終りに本刊行に當り助力せられたる元朝日新聞記者近藤春夫氏に感謝の意を表す。

皇紀二千六百年十月二十九日

楚水 遠藤宗作 識

目次

- 仙波兵庫翁英照……………一
- 家系——人となり——大人格……………二
- 政黨組織と憲政の功勞者……………三
- 偉大なりし政黨政治家……………四
- 加波山事件と仙波兵庫翁……………七
- 對外國論の指導實踐……………七
- 廢兵院設立に盡力……………七
- 水戸線鐵道の恩人……………八
- 常陸花崗石開發の恩人……………八
- 磯節を天下に紹介す……………九
- 俠 援 美 談……………一〇
- 富松正安氏遺族父子を守立つ……………一〇
- 政友に對する俠援……………一〇
- 逸 話……………一一
- 一國一城の主たるべき人豪なり……………一一
- 政友其他の愛稱せる異名……………一一



仙波兵庫翁英照
 (榎庄衛画伯筆)

二

茨城縣演説の嚆矢者……………二一
 親を背負ふて伊勢参り……………二一
 八に結ばれた翁の縁起……………二二
 自由青年大運動行進曲を作る……………二三
 趣味と晩年……………二三
 大往生……………二三
 人情新……………二四
 英靈に捧ぐ……………二五
 告別式(活動寫眞撮影)……………二七
 慰愛者芳名帳抜萃……………二八
 仙波兵庫翁年譜……………二九
 仙波兵庫翁傳記類……………二六



翁波仙の代時年壯

關東の中を貫く鐵道や

月雪花に筑波山霞ヶ浦か見ゆるそへ

あれ笛かなる汽車の窓花咲く都へ歸るそや

(明治廿九年丙申十二月十三日夜關東中央鐵道創立委員の時)



遠山滿翁七十七回喜壽祝賀會に於ける仙波兵庫翁

(國際官報刊載より)



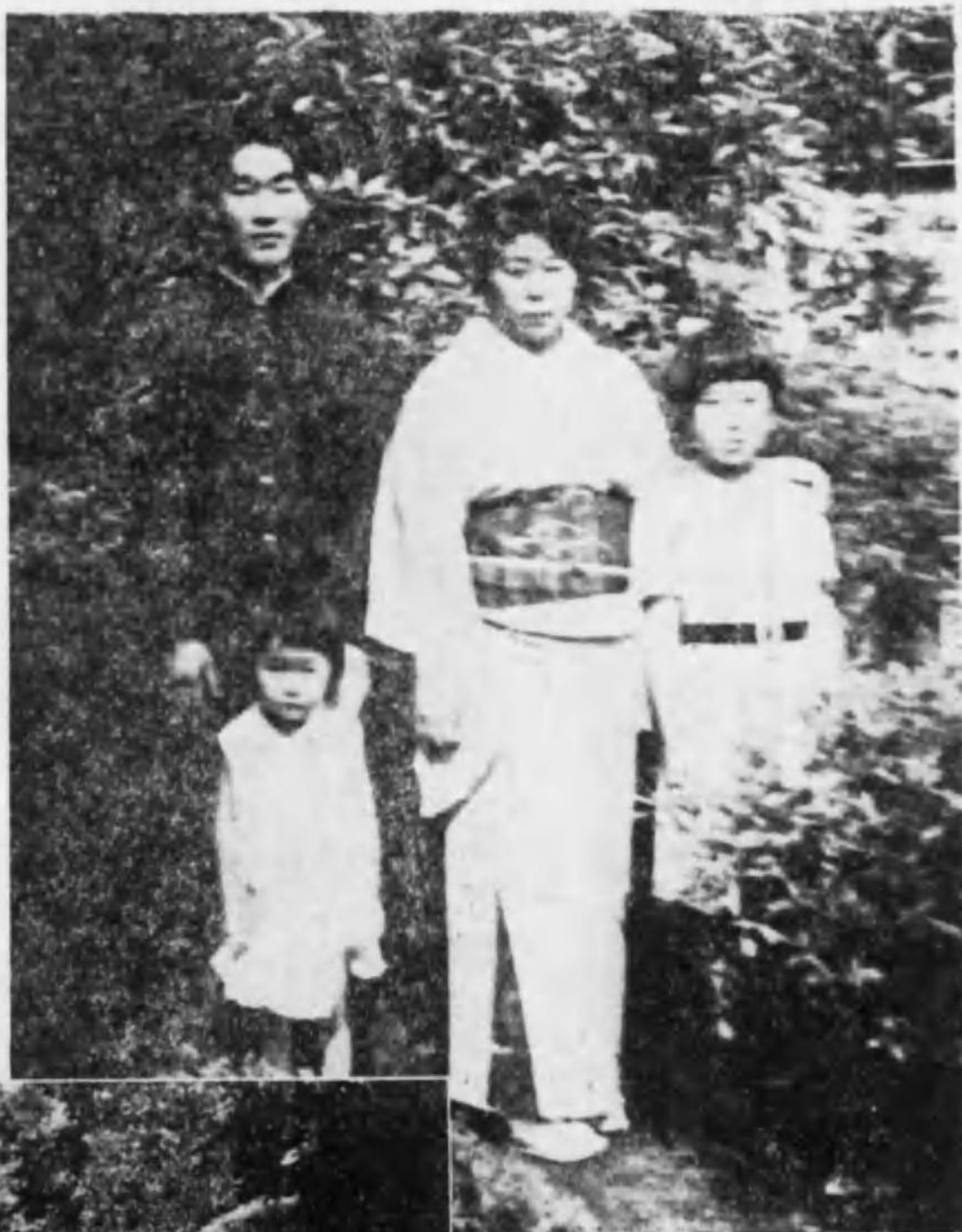
霞ヶ浦湖上に於ける仙波兵庫翁と遠山滿翁



前列右より四人目翁 右小久保喜七
左仙波吉江 中列右より三人目
司法大臣風見章の諸氏



右 翁
左 著者



下 右より著者の家庭に寄寓中の富松正安氏
曾孫 静子
翁の長女 てみ子 孫 裕久 孫 爲子



同庭園の
一部と
翁の愛玩措
かざりし狎
←

國士仙波兵庫翁を憶ふ

楚水 遠藤宗 著作

家系

仙波氏は贈太政大臣從一位粟田關白藤原道兼公より出で爾來一千數百年家系連綿として今日に至る。道兼の子宗圓、始め比叡山座主であつたが叔父正二位中納言左衛門佐兼隆の嗣子となり、天喜五酉年伊豫守源頼義、同八幡太郎公勅を奉じて奥州に下り安倍貞任、同宗任追討の砌り功有り、下野國司武門に補せられ宇都宮城主となる。其子宗綱從五位下座主三郎と號す。其子朝綱從五位上左衛門武者所に任じ、其子業綱次郎兵衛將と呼び、其子頼綱從五位下彌三郎、掃門介宇都宮檢校勅選歌人として重きを爲す。弟朝業鹽谷右兵衛尉と號し鹽谷郡を領して川崎城主となる。朝業七世の孫朝家仙波孫太郎と稱し、同國河内郡猪倉城主となり、仙波庄稻葉郷を領し從五位下因幡守に任せらる。永正年中國中逆心の時讒者のため所領を離れて伊勢に至り、大神宮社内佐伯神主壱縁の者につき之に據る。其子志摩守景朝兵庫介と號し、後ち志津庵と改む。故あつて享祿三庚寅年十月當陸國那珂郡太田村に居を移して専ら近郷の開発に意を注ぎ世々庄屋を襲ぎ土豪を以て畏敬せられたのである。

兵庫翁は實に其の第二十五世の孫に當る。

人となり——大人格

翁は常陸の名族に生れ、藤原道兼公の血を受けて天資豪邁、容貌魁偉にして其眼光は炯々、音吐又朗々たるものあり、

氣膽博大にして生死を眼中に置かず、身長六尺、二十餘貫の偉軀之れ悉く瞻なるが如き概あり、尊皇の志厚く、國家的觀念強烈にして平素「紀元何年」と記すを常として居た位で古く既に肇國の精神を體得して居たのである。又親に孝にして友誼に厚く、然諾を重んじて言行一致、廣く信用を博し、不撓不屈大事に堪ゆるの精神氣魄を滿身に横溢せしめ居り、眞に英傑の資を具へ、古武士の風格を偲ばしむる大丈夫であつた。

其の生るゝや時恰も家運衰亡、赤貧洗ふが如き時であつた。至誠剛直なる古武士の如き父傳之亟信朝「大覺院殿興譽法藏傳光大居士」と今政岡と呼ばれて郷黨より尊敬されたる女丈夫の母佐都子（吉生村岡野重兵衛平廣毅の二女）との間に生れ、頗る嚴格に育てられたのであつた。稀に見る傑物なりしこの父母はよく貧苦と闘ひ乍らも夙夜勵精遂に豪農となり資産郷土に冠たるに至らしめたのであるから翁も亦「この父母にしてこの子あり」の非凡なる風格を享け、起臥行止、常に重厚にして苟もせず、少時より夙く人の鑑みとして聲譽を擅にしたのである。

尙ほ先年小久保喜じ氏等數名の發起にて茨城縣に於ける「立憲志士亡友帖」を作製し同縣先進の國士にして先發後樂の至誠に終始せる人々として嚴父仙波傳之亟の名を掲げて居るが實に父子二代に亘り國士と歌はれた事は以て家門の譽れと爲すべき事である。

（明治三五、七、服部鐵石氏著茨城人物傳
明治二五、一、山寺清次郎氏著仙波兵庫君傳等より）

政黨組織——憲政の功勞者

粗末には出来ぬ憲政の功勞者だ——と政界人國記に三迂學人が翁を激稱した言葉がすべてを物語る如く、自由黨と大政友會とを作り上げた産みの親としての功績こそ、多彩なる八十一年の全生涯を貫き、先づ冒頭に掲ぐべき巨大なる足跡であらう。

自由黨創立委員として我が國最初の政黨を組織す——板垣伯と共に自由黨を組織し、同伯をして「仙波兵庫君は實に自由黨創立委員の一人として一騎當千の士なり……」と推賞措かざらしめた（板垣伯爵書翰より）

伊藤博文公と共に政友會を創立す——明治二十三年九月十三日政友會創立委員に擧げられ、我が國の政黨史が物語るが如く、伊藤公と共に立憲政友會を組織し、之を大成せしめたものであるが、この政友會結成當時伊藤公が翁の功を讃へて

田舎より一羽の鳥が飛んで来て千羽と云ふは誰れを呼ぶらん

と詠じたことはあまりにも有名な語り草であるが、茨城の一隅より出で、天下國家の爲め奔走し、大功ありし事を伊藤公が充分に認識し、以て歌に作つて之を天下に示したもので翁の働きの如何に拔群にして偉大なるものがあつたかを示すものである。

（明治三十三年九月十四日人民紙上政友會組織記事より）

偉大なりし政黨政治家

憂國の青年志士——明治十年十有八歳にして天下を四遊し、板垣退助、星亨、河野廣中、大井憲太郎、片岡健吉、中江篤介等をはじめ、四方憂國の士と肝膽相照らし、爾汝の盟約を結び、茲に翁の華かなる政治的生活が始まつたのである。

研光社々長に就任國論を指導す——仙波の私學校として茨城縣の官民からたゞへられた研光社の社長に推されたのが若冠十八の時、又二十歳の折には關東同志會、常總共立社等を組織し一面一千余圓の私財を投じ霜葉社を創設して政治雜誌を發行し、大に國論を指導し我が輝かしき憲政史上に特筆すべき活動の檜舞臺に起つたのである。

國會開設運動の重鎮——明治十三年十一月日本國會請願期成同盟會に代表として悲壯淋漓の大雄辯を揮つたのをはじめとし、國會開設運動の重鎮として東奔西走。遂に其實を結ばしめたのである。

政治家としての巨大なる足跡——郡會議員、學務委員、村會議員等に歴任して地方自治に盡瘁したるが如きは言ふまで

もない事であるが其の二十七歳のとき縣會議員となり、常置委員として其の最も得意なる明快の辯論と朗暢の音吐と整然たる論旨とは忽ち茨城縣會屈指の雄辯家として嶄然頭角を現はし。縣政の料理に當り議場の花形として俊村逸足の名を擅にし、一かどの政治家として認識されるに至つた。

衆議院議員となる——明治二十三年三十歳にして曾て身命を賭して其の開設を叫んだ國會議員第一期の總選舉に第三區（眞壁、西茨城）から立候補し、翁の郷里西那珂村の如きは其偉大なる功績に酬ゆるため全村の決議を以て選舉費用を繰出し奔命したるが如き美談もあるが當時小選舉區制のため郡と郡との對立上の犠牲となるに至つた。併し大選舉區制となるや餘裕卓として當選し、四十二歳にして衆議院議員として立法院に入るや望月圭介、加藤高明、粕谷義三、仙波兵庫の四氏席を連ねて同一議席にあり、衆議院議員選舉法中改正法律案委員、決算委員、常任委員、陸軍省所管第六科主査、第三部營利的官營事業調査委員、院內主事、特別委員、同委員會理事等に任じ、論議縱横、議場の花形たりしことは官報速記録其他の文獻によつて明かな所である。

明治三六、三、二〇、衆議院事務局へ提出せる自筆の履歴

明治三六、六、官報による

加波山事件と仙波兵庫翁

加波山事件の真相——昭和八年一月十日より東京朝日新聞茨城版紙上二十三回に涉りて連載された「仙波翁慰安の夕、加波山事件を追憶、岩瀬校に開催」と「回顧五十年加波山の義舉」の記事の冒頭に天下を震がらせる加波山事件は史料乏しく真相を誤るとある通り、從來正確なる史料なきため多く誤り傳へられ、史家をして之を遺憾とせしめたのであるが、翁の歿後遺族の手によつて其の秘蔵深く藏しありし諸文書を整理した所、偶々加波山事件の最も正確な史實を傳ふべき富松正安氏等事件の首腦者と翁とが當時往復せる文書多數を發見し、茲にはじめて加波山事件の真相を物語るべき唯一の貴

重なる資料を得たので、その全部は改めて世に送ることとし、只本書には加波山事件の重大關鍵をなす筑波會議に關する一文と、諸他の資料に依り加波山事件は翁と富松、保多の三人が密謀を遂げて明治十七年七月九日筑波會議を開き、同會では翁が推されて會長となつて協議を遂げた結果、明治十八年一月を期して兵を擧げる事を決議し、翁は主として東京に居て天下に號令する事になつたといふ事が明らかにされたのである。

即ち翁は筑波會議のため當時歸郷し居り、頻りに關係者と密信連絡を續けたものであるが同會議九日前の同年七月一日東京の富松正安氏より翁に宛てた左記書翰の如き歴史上非常に参考となるものである。

去る六月二十八日出發午後八時過ぎ着京せるも病氣に悩まされ居るため他事を措き名醫吉田宗全氏の診察を受け候處速かに入院して之を防がずんば不日大患に至る云々と、生考ふるに目下〇會（筑波會を指す）の期日もあり御約束の事もあり無用の時日を送り貴重金の圓を費すより寧ろ忍耐我慢すべく考へしも如何せん耳は益々濃汁を出して通ぜず股間痛みて進むに懶し、然れば其時に臨みて貴兄との盟約を果す能はざるに至れば萬々残念の至り故一先づ入院して快否を試みんと決心し昨朝入院せり萬々一藥療の爲め激動し身體不動に至り〇會に缺會するも緊要議決の件は照つて履行致すべく萬々御含みの上よろしく（後略）

明治十七年七月一日

富 松 正 安

仙 波 兵 庫 君

右の外諸種の文書を綜合すれば筑波會議の指導精神より發動したる加波山事件は翁と富松氏との胸中深く秘められてゐたのである。

斯くして期の未だ熟せざるに富松正安、保多駒吉氏等は期を誤り明治十七年九月二十三日遽かに加波山上に義兵を擧ぐるに至つたもので當時首盟富松、保多兩氏連名を以て

自分達は勢ひの赴く所遂に義兵を敢行した約に依り急ぎ來り援けよ
と急使が翁の許に飛んだ。

翁は之を一見富松の輕學大事を誤れりと私かに嘆息したが男子一度び生死を約す義任ぐべからずと爲してかの有名な

世運今日幾多端。 唯以一身當百難。

壯士此行知有死。 奮然欲救富正安。

の一詩を賦し斷發東京を然して盟友の難に赴き遂に下館大馬樓に於て朝憲紊亂の拘留狀に依り縛せらる。右就縛に當り警吏數十名蒲團等を持つて近づかんとするも能はず、遠播きにし漸く捕つたのであつた。斯くて三年の後も明治十九年十月五日

縲洩歸來既幾霜。 孤懷日夜夢翱翔。

今朝遙望青天外。 筑岳聳邊是我鄉。

の感懐を残して水戸の監獄を満期出獄したのである。其の出獄當日の出迎への有志は縣下各地は勿論他府縣人を混へて頗る多數に上り、人力車は蜿蜒十數町に達し實に當地に於ては空前絶後の現象であつた。翁が如何に多數の有志から尊崇されて居たかを物語るものである。

右出獄の日は恰も劍頸の交を結んだ同志富松正安が千葉監獄に於て絞罪に處刑された日であつた。翁の爲め多數有志によつて各地に慰安の盛宴が張られたのである。然るに翁は之に臨むも喜ばず憂心忡々たるものがあるが如くであつたが之れ親友の處刑を思つたからで、席上「兵庫が生きて居る以上富松君等の大志を繼いで民人の福祉を増進し皇國の爲に盡して以て其靈を慰める」旨を述べ、爲に一座肅然として感激したのであつた。

(明治一七、七、一、一八 富松正安より翁に送れる書翰其他書信による)
(明治二七、一、二八 山寺清二郎著仙波兵庫君傳政界人國記による)

對外國論の指導實踐

翁は近衛霞山公(現首相の尊父)、頭山滿翁等と肝胆相照らして親交を續け、明治三十六年十月五日對露同志會を組織し、同日頭山翁と共に三十名の實行委員に擧げられ、同年十二月十六日神鞭知常等同志五十九名と共にト奏、遂に政府をして日露開戦を強決せしめ、又支那朝鮮の志士金玉均其他の諸氏とも親交を結び、常に對外國論の指導實踐に向つて熱血を傾け、明治二十七年十二月九日清戰役東京市祝捷大會には翁は發起人千五百名中より淺野長勳侯外百八十人と共に専務委員に擧げられ會員十五萬人を算する前代未聞の祝典を擧げ(翁自筆當日の日誌其他による)、又昭和十三年十一月二十五日の日獨防共協定國民大會には之が主たる發起人となつて未曾有の感激的大祝賀會を舉行、更に歿年八十一歳の昭和十五年四月六日には南京國民政府成立慶祝阿部特命全權大使壯行國民大會を發起して對支問題の結實に深く意を傾くる等、棺を蓋ふに至るまで國民外交の樞軸に參し隠然重きをなし居たるものであつた。

(明治三六、二、一六、上奏案
明治三六、二〇、五、對露同志會全國大會記錄其他)

癩兵院設立に盡力

明治三十七年十月初旬より癩兵院設立に盡力する所あり、當時癩兵院の事を知るものなく、諸般の取調上非常なる困難に遭遇したるも夙夜諸方を奔走して當局は勿論諸大家を説き漸く政府當局を動かして遂に明治三十九年二月第二十二回帝國議會に癩兵院設立の法案を提出し之が通過を見るに至つて東京大塚に癩兵院を設立したので翁が卒先唱道したる功績は頗る偉大なものである。乃木將軍は癩兵を慰安する事に腐心し屢々同院を訪問して慰めたものであるが、同院の設置に就いては非常に感謝して居たのであつた。

水戸線鐵道の恩人

明治二十年茨城縣下に鐵道敷設の議起り南部土浦派と北部小山派の兩者は地方死活の重大問題なりと爲し、互に敷設を熱望して鎬を削り、論争沸くが如く兩派の對立は激化し、遂に大勢は土浦派に傾き小山派は一敗地に塗れんとするに至つたのである。

時に翁は縣會議員として縣政界の重鎮であつたが悠然少しも動ぜず、小山派を率ひ其の總帥として「鐵道敷設の勝算は余が掌中にあり」と衆望を負つて單身奮起し、縱談横議、北線の公益は遙かに南線に優り全縣下に及ぶ所以を説きて東奔西走、銳意論難駁撃の衝に立ち、遂に南線論の根據を覆へして之を屏息せしめ、更に栃木、群馬、長野、三縣知事及び有志家を歴訪して小山線の利と之が三縣下に及ぼす好影響とを説き遂に三縣知事をはじめ官民一致の小山線敷設請願書を出さしめて北部線即ち現在の水戸小山間鐵道の敷設を決し、凱歌を擧ぐるに至つた。

既にして仙波組（組長仙波兵庫）に於て鐵道敷設の工事を行ひ、明治二十二年一月全線の開通を見るに至つたもので其の結果は地方の開発に貢獻すること至大なるものあり、爾來六十年の久しき沿線數萬の民衆は均しくその惠澤に浴しつゝあり、今の福利又計るべからざるものがあるから、敷設當初の苦難を思ふとき、翁こそ夢忘るべからざる水戸線の大恩人なのである。

（東茨城郡大場村稻荷村下大野村磯濱町選舉有志者の推薦狀其他より）

常陸花崗石の恩人

常陸産花崗石は翁の慧眼に依り五十餘年前に發見されたものである。萬葉集に

筑波山あのもこのもにかけいあれど君がみかけにますかけぞなし

の一首に考證を得、深く著目する處あり、精査探究を重ねて之が開發に渾身の力を傾倒せる結果、今日の華々しき黄金時代を招來せるものである。

この常陸花崗石は、石質の堅緻なると、光澤に富み良質なるとを以て鳴り、茨城縣下西茨城、眞壁、新治の三郡に跨る加波、雨引、足尾等の諸山蜿蜒數十里の間より産するも、當時運輸の便なく、天下の至寶も空しく山中に埋もれて顧みられざるを痛く惜しみ、仙波組を創立水戸線を開通せしむると共に、常陸石材會社を發起し、之が創立委員長となり、會社創立後は副社長に就任、地方民の福利増進と産業開發のため遠近數十里の諸山を買収して各地に搬出、又明治二十二年六月二十九日開催の内國觀業博覽會其他に出品し、茲にはじめて常陸花崗石をあまねく天下に紹介し、爾來五十年の久しき數十萬に及ぶ地方人を潤して現在に及び遂に之を茨城縣下の一大物産たらしめたるが如きは實に翁が常陸花崗石の大恩人として永劫に忘れる事の出来ぬ偉大なる事蹟である。

（明治二六、四、五 坪谷善四郎氏著實業家百傑傳より）

磯節を天下に紹介す

仙波の磯節として普く喧傳さる

六十年前の翁の日記をくりひろげて見ると磯節は水戸人の氣質を發露せる常陸の國歌なりとして天下に紹介して居る記事が隨所に見られるのである。今でこそ磯節は何處でも聞かれるが元來磯節は直ちに怒濤と飛沫とを連想するもので高樓廣瀾の大座敷に於て高唱亂舞するに適する男性的歌謡にして、江戸時代水戸の船乗が江戸に通ふ時、水戸の船乗なることを誇らかに歌つたものだけに全く漁夫が鱸を漕ぐ時に出した氣合の懸聲そのもので今でも之を歌ふものはその心懸けが必ずやだとして居る。

翁は最も磯節を好み國事に奔走する間も忙中自ら閑あり、常に之を朗唱し以て水戸精神の昂揚に努めたるため、所在仙

波の磯節として感激の嵐を浴びたものである、即ち六十年前翁自作の

水戸で名所は仙波の暮雪仙波見えますホノノと

を以てオハコとし、其の在る所、興をやり六尺の偉軀滑音の妙を傳へ萬人の唱和する域に進み普く天下に喧傳さるゝに至つた。

三十五反の帆をまき揚げて行くよ仙臺石の巻

月の姿にたいほだされて鳴くや仙波の渡り鳥

水戸で名所は借樂園よ梅とつゞじに秋の花月の眺めは仙波沼

などは最も愛唱したものであつた。

(明治一二以降翁自筆の日誌及舊友の談話より)

俠 援 美 談

富松正安氏遺族父子を守立つ

加波山義舉の首領にして翁が出獄した當日刑場の露と消へし富松正安氏の遺兒長男民雄氏は早生せしが二男午郎氏に對しては終始生活上の面倒を見、遂に明治三十二年二月二十一日翁の親友靜岡縣知事加藤平四郎氏に懇談、同縣廳吏員に採用せしめ、其の子息正巳氏(正安氏の孫)に對しても森久保作藏氏其他と協力好配を得せしめ、其他よく世話をなして不斷に念頭より忘れず、常に盟友の裔に至幸あらしめんとせしが如き翁にしてはじめて爲し得るもので、富松氏の冥福を祈りて止まざる至誠の發露ではあるが、翁の精神美の具現されたものである。(翁の日誌中より)

政友に對する俠援

嘗ての「自由黨筑陽隊長」にして「チヨホールの王様」でもあつた有名な川島烈之介氏が養育院に收容された時、翁は

直ちに駈けつけて退院させ親身も及ばぬ世話を續け小久保喜七氏をはじめ多數の政友を感激せしめた暖かい人情佳話をはじめ、「憂國先生の」稱ある森隆介氏其他終始一貫死に至るまで米鹽を送り生活を維持せしめたもの數十名に及ぶが如き稀に見る俠援美談として専ら政界を賑はしたものである。

(明治一、一二、二九東京朝日其他の事實による)

逸 話

○一國一城の主たるべき人豪なり

仙波兵庫を評するもの、堅忍不拔、刀鋸前にあり鼎鑊後に具するも動ぜざる豪膽の人にしてこれを戰國に坐せしめんか正に一國一城の主となるべき人傑であると言はざるは無かつた。(服部鐵石氏著茨城人物傳其他より)

○政友其他が愛稱せる翁の異名

加波山將軍——加波山事件より來る

馬上將軍——悍馬扱ひの名人にして代議士選舉に馬上常に縣下を馳驅せるによる

仙波攝津守——兵庫翁の名より來る

仙波兵庫頭——古英雄の風貌あるに依る

仙波將軍——加波山事件以來の大豪傑の異稱

○茨城縣演説の嚆矢者

明治十年十一月岩瀬町犬田仙波の私學校「研光社」校舎に於て演説會を開催したが茨城日報は當時茨城縣演説の嚆矢文明の魁なりと激稱したものである。

○親を脊負ふて伊勢参り

明治四十一年十一月二十八日（翁四十九歳の時）至孝の翁は賴齡の老父を存負ふて伊勢参りの旅に上り伊勢、京都、奈良神戸、住吉、名古屋、熱田等各地の参詣を重ね、一月十日歸着したが老父も心から満足して喜びに溢れ、子の翁も感激の涙に暮れて打ち喜ぶのであつた。

春雨や紅賣りの來る京の晝 當時京都より送りたるもの

日の出る國民の誇り伊勢詣で 同 伊勢より

（飯田重太郎翁談話より）

○八に結ばれた翁の縁起

十八歳——天下を周遊し國事に奔走、研光社社長に推される。

衆議院議員——第八回衆議院總選舉に出馬當選す。

得票千八百十八票、第十八回帝國議會に登場。第十九回帝國議會にも活躍した。

○自由青年大運動行進曲を作る

明治十六年十一月二十三日二十四歳の時、富松正安外二名と共に發起人となり自由青年大運動會を東京飛鳥山に開催した。

會するもの百餘名、何れも熱血志士を以て任ずるもの、活潑壯快の戯を演じ薄暮に至りて解散した、時に翁は自由青年大運動會行進曲十六節のものを作り、一同に高唱せしめ以て士氣を鼓舞した。これを終つて大井憲太郎、富松正安、森隆介と共に一行四人彼の有名な茨城縣巡視に出發、兩國橋下より舟を以て古河に至り、小久保喜七氏等數十名に迎へられ、太田樓の大懇親會に臨んだ。更に下妻、水戸、湊を経銚田に出で舟を霞ヶ浦に泛べて阿波に上陸、大井、森の二氏に別れ翁は富松氏と共に歸郷したが飯村丈二郎氏をはじめ各地に於て多數の同志と時事を痛論し大に民權思想の普及に努めたのであつた。

趣味と晩年

翁自作にかゝる愛郷の歌「岩瀬よいとこ筑波をうけて南雨引北富谷」にある郷里岩瀬町を深く愛し恰も兒孫を見る風ありしも老來松蔭神社に近き終焉の地東京市世田谷區太子堂町四八一番地の閑靜なる梅珠莊にありて悠々自適し、老來益々健かにして嬰孺壯者を凌ぐものあり、前に記載せるが如き驚異的活動をつゞけ傍らその趣味とせる國史に親しみ、書畫骨董等を愛玩して居たが、政界實業界に活動して居た當時畫家の世話を爲したる事一切ならず、小室翠雲畫伯とは格別の親交を重ね翁の知遇を受けたる者甚だ多く殊に長瀧楓外、佐藤曉關、若井晃華、小杉樸陵等の諸氏を始め多數に達して居るのである。又寸暇を見ては加波山事件の真相等につき執筆するのを日課とし、飽きると程遠からぬ著者の宅に歩を托けて一日の快遊をなすことを無上の慰樂として清福なる晩年を送つて居たのである。

大 往 生

昭和十五年七月三十一日夜より二豎の胃す處となり専ら靜養に努めたのであるが、曾て昭和十年九月四日家族等を集め喫茶の席にて筆をとり

願くは秋の彼岸にわれ死なん其の中日の入相のころ

と記した如く、昭和十五年秋の彼岸の中日に相當する九月二十三日午後一時三十五分、既に死を覺悟して大悟徹底、此の憂ひをも現はさず、喜んで永へに白玉樓中の人となるべき事を思ひつゝ、居合す近親の者全部と訣別の握手を交し、満足の笑を含みつゝ八十一歳を一期とし溘焉として聖者の如き相を残し、恰も釋迦牟尼の涅槃に入つた時も斯くやと思はせるやうな有様にて佛者の所謂寂滅爲樂を其のまゝに、眞に偉傑に應はしき大往生を遂げたのである。翁の此世に生を受けしは萬延元年三月櫻田事變勃發の日に生れ、其死するや恰も自ら企てたる加波山事件議學の當日たる五十七年後の九月二十三

日に逝去す。嗚々の聲をあげし時より計に至るまで八十年の生涯を通じて宛ら勤皇革命の思想に培はれたるものゝ如く眞に畏敬に値すべきものあるを思ふ。憶。

人情 嘸

仙波翁が多数名士との間に交友のあつた事は知友の多くか既に他界せられたるに拘らず尙其訃報により弔問せられた人々の中に一流名士が多数居る事でも判るが就中頭山満翁、望月圭介氏等とは特に親交あり、頭山翁とは古く對露同志會以來各種の運動會合等には大抵行動を共にしたものである。それが爲め頭山翁は仙波翁の逝去と聞いて非常に歎かれ、進んで友人總代となり、自ら葬儀に参列して靈を慰めるは勿論遺族に對しても種々義侠的行爲に出でた事は友情の發露とは言ひ乍ら眞に敬虔の念が起るのである。又望月圭介氏は翁の訃を知り、早速弔問靈前に鄭重な花環等を贈られ葬儀當日も親しく焼香し遺族の行くべき道に付き何くれと親切な言葉をかけられたので遺族一同何時も乍ら其の人情味の豊かなる事に感激し流石に人情大臣と歌はれた望月先生であると感激せしめた。

又敬虔な翁は公爵徳川園暉閣下を常に「吾等の殿様」とお呼び申上げて居たが陞爵祝に水戸綠岡邸への招待や御息女典子姫の御婚儀披露をはじめ數々の書翰をくりひろげて見ると感銘深いものがある、次に底知れぬ人情味の持主大久保東京市長をはじめ多くの人々が翁の告別式に示された眞日本人の人情嘸はその何れも純美の極致のもので遺族の者は素より之を聞くものも感激の聲を放つて傳承すべきもので翁も地下に感謝の涕に咽んで居るをと思ふ（此項葬儀委員長柴田秀信氏談）

英靈に捧ぐ

（弔辭より拾ふ）

橋本新太郎

現世に残しし君が功は永久に仰かむわれ人ともに
功をなし名もまたとけて君ははや彌陀の淨土に行かれける哉

本圖晴之助

四十あまり五年國につくしたる君ちりにけりさくらわくら葉

山形市外 有耶無耶莊主人

我が後に誰れか來らしも先き立ちし人は吹雪に影の見えなし

羽生清作

巨星の墜ちたるを悼む

山形市外 有耶無耶莊主人

仙波翁の明治魂の存する限り日本は神國に候

八王子中學校長 太田秀穂

郷黨政界の大先輩仙波兵庫翁の御永眠を悼む

宮内式部官 高橋 崑

我が郷の偉人仙波翁を失ひたるは痛恨に堪へず候

文學博士 市村瓊次郎

尊大人の御逝去を敬悼す

遙かに靈柩を拜す

茨城日報社長

大塚 任天

元鐵道大臣秘書官

海老澤 廉

憲政史上に輝かしき御足跡を遺し躍進日本のため多大の御貢献被遊たる御遺跡に對し
國民の一人として絶大の敬意を捧ぐるものに有之候

茨城縣總上村長

齋藤 善一郎

仙波大人の御逝去を敬悼す

弔 詞

志は千秋の松の如く風霜を凌いで巍然として聳立す孤節世に阿らず昂々として操持確固老齡に至りて益々其の人と爲りの高く且つ清きを見るもの實に仙波兵庫翁なり
翁は若冠己に頭角を露して郷黨の指針となり自由黨に入りて民權の擴張弊政の打破を叫び加波山の一舉は時の政府の檢舉を受けしも尙不撓不屈の精神を以て國事に奔走し或は縣會常置委員となりて縣民の爲めに盡力し進んで衆議院議員の榮冠を得て國政に參列す剛毅率直正論黨議忌憚する所なし 余は翁と知ること五十年今や幽明處を異にす 高風明月の夜 老鶴の天に上りて清姿を消すに肖たり
茲に蕪辭以て翁の靈前に供す 希くは饗けよ

大日本忠愛義會本部

辱 交 高安 龜次郎

維子時 昭和十五年九月二十三日午後一時三十五分彼岸中日是恰加波山上義舉之日東京市世田谷區太子堂町四八一番

地 瀧馬 長逝矣

同年同月二十七日午後二時太子堂町四六八目青不動尊安置 名刹 小田原大久保伊賀守菩提寺

天臺宗竹園山教學院 最勝寺住職林寛亮師爲導師嚴肅執行

昭和十五年九月二十七日

男 仙波 清綱

仙波 太郎平

親戚總代

遠藤 宗作

榎戸 耕衛

飯田 要

頭山 滿

友人總代

柴田 秀信

葬儀委員長

告別式と弔靈者芳名

嚴蕭な告別式

仙波翁の告別式は九月二十七日午後二時から六時まで世田谷區三軒茶屋の名刹教學院に於て執行、朝野の名士多數參列したが當日新世紀映畫製作所長太田道正氏の好意に依り告別式の模様を映畫に納め、永く保存する事が出来たのは感謝に耐へない。

弔靈者芳名帳拔萃

(いろは順 敬稱省略)

東京瓦斯社社長 三井銀行取締役 東京帝國大學名譽教授 東京帝國大學名譽教授 前特許局長 東特許局長 東特許局長 前專賣局長 前厚生省參事 前議院議員 明治製糖重役 醫學博士 前茨城縣會議長 皇道振興會長 榮老共榮團主 神道扶桑大教正 東北勸務廳顧問 警視廳警部 日東映畫社 東京府立圖書館學校教授

井坂孝 市村瓚次郎 石井銀彌 石井淳二郎 飯村五郎 稻見忠 石崎仲三郎 岩田荒三郎 生田經德 岩崎善衛門 石島德長 糸賀慶雄 岩波清治郎 遠藤清藏 江間俊雄

集鴨女子商業學校校長 マハヤナ學園校長 前衆議院議員 理事 茨城縣人會理事 貴族院議員 言文社々々長 大日本救世團長 公 子爵 東京市市長 新世紀映畫製作所

長谷川良信 葉梨新五郎 原田幸吉 早矢仕四郎 橋本新太郎 萩原芳孝 畑原順治 西野元 西村文則 本田仙太郎 徳川閑順 頭山滿 大河内正敏 大久保留次郎 太田道正 小田部胤康

八王子中學校長 常總新聞社長 大日本協會理事長 司法大臣 前司憲法大臣 前司憲法大臣 衆議院議員 衆議院議員 大日本國民中學會主幹 洗心會靜岡道場主 黒龍會

太田秀穗 岡田博 渡邊弘 渡邊卓哉 風見章 川村竹治 川崎巳之太郎 川口義久 河野正義 川崎米吉 加藤芙蓉 鎌塚勇次郎 門田善哲 川村善助 川崎三郎 吉原國三 吉川正忠 近藤春夫 上坂嘉藏 田中龍夫

玉村式鐵索發明者 大日本忠勇義會本部 宮内式部官 養勇館道場主 城南工業組合理事 帝國神社會長 辯護士 大日本弓道會會長 女子學習院弓道師範 前政友會總裁 前鐵道大臣 茨城縣物產所長 紹介 大日本青年聯盟理事長 大政翼賛會總務 前衆議院議員

玉村勇助 高安龜次郎 高橋嘉一 高倉嘉一 高野亨太郎 館野亨太郎 田宮馨 立石正夫 筒浦政邦 根矢鹿兒 根矢久平 中島知久 長瀨青巖 中山浩 村居鐵城 內田信也 植田菊之助 野口恒次 久保山輔 葛生能久 山能野

日本の委顯揚隊長
子すめらき道
神原運命科學研講所
常總新聞主筆
帝室技藝員
大日本カメラ協會々長

前鐵道大臣秘書官
衆議院議員
東亞發聲ニユース
南昌洋行社長
櫻井病院院長
茨城縣人會理事
醫學博士
荒川區會議員

山崎泰雄
安田晶彦
安井正芳
安野貞亮
牧野玉葉
橫原貞亮
福地翠雲
小室翠雲
小谷ヘンリ
小久保昇
近藤重次
海老澤廉
安藤正純
天野正男
齋藤茂一郎
櫻井茂四
佐川銀祐
佐藤寛太郎
佐藤銀一
佐久間吉太郎
坂部良照

茨城縣人會理事
前商科大學教授
辯護士
生理療法研究所長
早稻田大學教授
法學博士

前內務大臣
東京府市會議員

前衆議院議員

櫻井北洲
木村淺治
峯間信吉
宮部榮助
三井田二
鹽澤昌貞
志賀武雄
白井康雄
城井再光
平井節雄
姪田順一郎
日向尚
日口梢
樋口圭介
望月圭介
本圖晴之助
須藤喜三郎
末川量一
杉原豐
鈴木銳
鈴木優

東京自動車學校長
大日本活動寫眞新聞
岩瀨町長

岩瀨町會議員
結城郡總上村長
前下館町長
前茨城日報社長
大田神社々掌
法藏院住職
月山寺住職

南京大陸新報社長

岩瀨町會議員
岩瀨町役場吏員

鈴木富次郎
鈴木靖二
鈴木笛人
仙波左武呂
一色武雄
鈴木基一
齋藤善一郎
市村兵庫
大塚任天
仙波吉江
川野邊正治
寂室純薰
糸賀覺三郎
新山壽一
清水兼吉
田山幸藏
高野毅一
鈴木善一

大連
朝鮮
九州
同
同
山形市外
栃木縣
新潟縣
靜岡縣
朝日町
飯田重太郎
飯田三男
飯田龜次郎
飯田六郎次
飯島六郎次
鉢田主計
大和田貞良
大和田祐次郎
若林一男
高橋さと

飯田重太郎
飯田三男
飯田龜次郎
飯田六郎次
飯島六郎次
鉢田主計
大和田貞良
大和田祐次郎
若林一男
高橋さと

池羽如平
板垣市五郎
古川福太郎
脇山正子
古川國造
有耶無耶莊主人
池羽虎吉
上金秀一
富松正己
岩瀨喜美子
榎戸耕衛
飯田禮子
池羽禮子
榎戸元彦
原田茂三
岡野宇海
大野みち
綿引茂
高田歙
中原とく

松井一壽	藤田文雄	宮川榮太郎	柴田秀信
小泉金藏	雨谷義人	仙波靜馬	仙波金造
雨谷九十九	佐藤清	仙波喜平	關口清三
皆川新之助	皆川四郎	鈴木誠	白井庄一郎

仙波兵庫翁年譜

萬延元年 三月三日茨城縣西茨城郡西那珂村大田に生る。

明治八年(一六) 學務委員

明治十年(一八) 大志を抱き天下を周遊して四方愛國の志士と深く結び板垣退助、尾亨、大井憲太郎、片岡健吉、河野廣中、後藤象次郎等と親交を結ぶ。

研究社々長に推されて就任す。

大田村校舎にて演説會を開催、茨城縣演説の嚆矢なりと茨城日報激稱す。

關東同志會、常總共立社を起して國會開設を首唱す。

明治十二年(二〇) 私財一千餘圓を投じ雜誌霜葉社創立(東京神田區)自由黨を組織、創立委員、自由黨本部幹事に擧げらる。

明治十四年(二二)

學費共融會長に就任

明治十五年(二三)

發起人となり東京飛鳥山に自由青年大運動會を開催す。

明治十六年(二四)

筑波會々長に推さる(加波山事件これより起る)

明治十七年(二五)

加波山事件に連座茨城縣下館町大巴樓に於て朝憲紊亂の罪により捕縛水戸監獄に投ぜらる。

明治十八年(二六)

嚴禁從容として同囚を教諭訓戒して牢名主となる。

明治十九年(二七)

十月五日滿期出獄(この日親友宮松正安千葉監獄にて絞罪に處さる)

明治二十年(二八)

縣會議員當選 水戸線(水戸小山間)鐵道敷設を決す、西茨城同好俱樂部を組織す。

明治廿一年(二九)

仙波組々長に推され水戸線工事を進捗せしむ。

明治廿二年(三〇)

帝國工業會社理事、茨城縣親睦會々長、日本衛生會茨城支會名譽會員に各就任

茨城縣會常置委員、茨城縣徵兵參事員、茨城縣地方衛生會委員、茨城縣尋常師範學校商議會委員、茨城縣親睦會々長重任。

岩瀨物産運輸會社副社長、金井運輸會社取締役、常陸石材株式會社創立委員長、同副社長、日本石材株式會社々長

東京肥料株式會社取締役等に就任、第三回内國勸業博覽會に常陸花崗石を出品之を天下に紹介す、岩瀨警察署を新築開署す。

明治廿三年(三一) 明治美術會評議員

日清戰役東京市祝捷大會發起人千五百人より百八十人の專務委員に選舉され參加人員十五萬人前代未聞の大祝賀會を開く。

常總鐵道株式會社專務委員。

關東中央鐵道株式會社(岩瀨取手間)創立委員水戸製鐵株式會社創立。

憲政黨茨城支部結成。

憲政黨茨城支部代議員、郡會議員當選、加波山事件殉難志士建碑に關し柏田知事に會見宮松正安氏等の復讐方に付き盡力す。

明治卅三年(四一) 行幸御用係、立憲政友會組織、創立委員、立憲政友會茨城縣支部評議員、常總新聞發刊發起人。

明治卅四年(四二) 西茨城郡教育會委員、立憲舊友會を組織す。

明治卅五年(四三)

衆議院補充議員當選(八、一〇)茨城民報創立委員、日本硝子株式會社を起す。

明治卅六年(四四)

衆議院議員當選(三、一)第十八回帝國議會、對露同志會を組織す、下毛貯蓄銀行取締役、財政協會創立委員。

第十九回帝國議會解散(三六、一一、一〇)

明治卅七年(四五)

療兵院設立に百方調査盡す。

明治卅八年(四六)

財産火災保險株式會社々長、常陸無煙炭礦株式會社創立委員長、帝國義勇艦隊建設に盡力す。

明治卅九年(四七)

療兵院設立法案第廿二議會に提出、東亞勸業博覽會評議員、合資會社日韓貿易商會顧問、同慶俱樂部(韓國開發關係)委員工事新報社顧問、東京砂利株式會社を起す。

河北野口勝一氏建碑

雨引山樂法寺に於ける日露戰役茨城縣戰病死者大追悼法會委員施主に推選さる。

東京上野公園に於ける日露戰役戰病死者大追悼法會會施主

東洋煉炭株式會社を起す。

藥川鐵泉株式會社、帝國競馬株式會社、東洋電機株式會社、株式會社陸行洋行の四會社を創立す。

父傳之丞と共に伊勢參りをなす、韓國拓殖同志會を起す、下館町妙西寺に加波山事件殉難志士廿二回追悼會開催。

明治四十年(四八)

三月十七日嚴父國士仙波傳之丞翁八十四歳を以て死去す。

明治四十二年(四九)

憲政同盟會を組織す。

大正二年(五四)

大正活動寫眞株式會社を起す。

大正三年(五五)

新寶石油株式會社專務取締役。

大正五年(五七)

國民興信所創立。

大正七年(五九)

金萬汽船漁業株式會社を起す。

大正十年(六二)

平和記念博覽會に科學知識普及の學術講演部設置を建案實施す、立憲新興會創立、後藤新平子爵對義民力滿會を

大正十一年(六三)

育成す。

飯村丈三郎氏と横濱ビルディング創立

東京育像學院顧問。

普選同志會組織す。

中外商業新報掲載小説人は叫ぶに一代記出づ朝比奈知泉文集出版發起。

東洋醫道會を起し皇漢醫學を發刊す。

頭山滿翁辰辰祝賀會發起。

田中光顯伯傳記刊行に盡す、朝鮮志士故金玉均遺子金英鎮氏と交遊、茨城縣人會評議員。

朝鮮、九州周遊飯村丈三郎翁傳記編纂發起、田中光顯伯銅像建設發起。

小塚原忠魂碑首唱建碑、ジョホール王川鳥烈之介氏俠授。

農人形銅像建設、丈翁六週忌追悼會發起。

仙波兵車翁慰安の夕岩瀨小學校に開催招待さる、頭山滿翁其他と駐日中華民國公使館附武官甘海瀾少佐歸國送別會

開催日本刀一振贈呈、日滿親善會本部顧問、茨城縣鹿島根本寺内蕉翁遺德敬仰會主唱發起。

内田信也氏入閣祝賀會發起、考註具原益軒養生調普及會代表者。

帝國議會講事堂竣工式典に臨む、五百木良三内田良平兩氏大追悼會開催、大日本萬靈會首唱組織す。

古均先生金玉均氏第四十四回忌に追悼辭を述べ、峯間信吉氏慰安及恩人碑顯彰記念會發起。

日獨防共協定國民大會舉行發起。

中小茨城縣人會評議員重任。

衆議院開設五十周年記念衆議院議員略歴に傳記登載、阿部特命全權大使壯行國民大會舉行發起。

九月二十三日逝去

法號を仙照院殿慈尊兵翁清大居士とす 享年正に八十有一

仙波兵庫翁傳記類

本書の編著に當り参照せる仙波兵庫傳記類は左記の通りである。

一 仙波兵庫君傳	明治廿五年一月廿八日	山寺清二郎著
二 實業政治家仙波兵庫君傳	明治廿三年五月五日	尾見延壽著
三 大日本名士傳	明治廿四年八月五日	鐘夢居士著
四 大日本帝國議員	明治廿三年一月廿八日	小林幾太郎著
五 常總名家傳	明治廿三年三月一日	木戸偉太郎著
六 茨城人物傳	明治廿五年七月廿七日	服部鐵石著
七 實業家百傑傳	明治廿六年四月五日	坪谷善四郎著
八 實業人傑傳	明治三十年二月八日	廣田三助著
九 帝國名士叢傳	明治廿三年二月六日	岬濤居士著
一〇 衆議院議員候補者列傳	明治廿三年三月六日	大久保利夫著
一一 政界人國記 <small>仙波兵庫の巻</small>	三 迂 學 人	いばらき新聞
一二 東 睡 民 權 史	明治廿六年七月七日	關 戶 覺 藏 著
一三 自由黨秘錄	昭和五年十月二十日	伊 藤 痴 遊 著
一四 自由か死か	昭和十一年七月一日	玉 水 常 治 著

一五 常 磐 の 松	昭和十二年二月十一日	石 島 徳 長 著
一六 加 波 山 事 件	明治廿三年十二月十日	草民野島幾太郎著
一七 衆議院議員要覽	昭和八年二月 二十二回	衆 議 院
一八 回顧五十年加波山の義舉		東 京 朝 日 新 聞
一九 小説自由黨秘史人は叫ぶ		中 外 商 業 新 報
二〇 し も だ て	明治四十二年十一月三十日	樋 口 直 一 著

406
105

昭和十五年十一月十一日印刷
昭和十五年十一月十二日發行
(非賣品)

刊行者 柴田秀信
東京市京橋區新富町二ノ一三

著者 遠藤宗作
東京市世田谷區三軒茶屋町七三

編輯兼印刷 近藤春夫
東京市世田谷區上馬町一ノ八三六

印刷所 岡野印刷所
東京市日本橋區芳町一ノ六
電話茅場町(6)二〇九三番

終

